

第一章

朝起きると、ショーツがぐつしよりと湿っていた。

（まただ……オナニーしたあと、ちゃんと拭いたのに……）
最近ずっとこんな調子だ。

以前からこういうことはあつたけれど、だんだんその間隔が短くなっているように感じる。

（最近毎日してるから……身体がえつちになっちゃったのかな……少し控えた方がいいのかも）

クロッチ部分が肌に張りついて気持ち悪い。早く拭いて、ショーツを取り替えないと。

「はあ……」

朝からなんだか憂鬱な気持ちになってしまった。

そんな気持ちを振り払うように勢いをつけてベッドを降り、クロージェットの下着入れからショーツを取り出した。

「おはよう、未玖^{みく}」

部屋を出ると、ちょうど洗面所から出てきた慧仁^{けいと}お兄ちゃんに声をかけられた。

「お……おはよう、お兄ちゃん」

まだパジャマ姿の私と違って、お兄ちゃんは糊が効いたパリッとしたワイシャツに着替え、ネクタイをきつちりと締めている。

（う……きまわずくて顔が見られない……）

だって、べつとり下着に染みを作るほどオナニーに耽った後だし。

清廉潔白を具現化したようなお兄ちゃんを目の前にとすると、なんだか自分がひどく汚れてしまったようだったまれない。

うつむいて頬を染め、もじもじしていると、お兄ちゃんが身を屈め、気遣わしげに顔をのぞき込んだ。

「どうした？　なんか顔が赤いぞ？　もしかして熱でもあるのか？」

「だっ……大丈夫！　ちょ、ちよつと暑くて火照ってるだけだから……」

端正な顔を近づけられて余計恥ずかしくなり、慌てて顔を背けてしまふ。

「ホントか？　なんか目が赤いけど……また眠れなかったんじゃないか？」

「ううん。お兄ちゃんがくれたサプリのおかげで、よく眠れてるから」

……心配しないで」

「そつか。またなくなりそうならいつでも言ってくれよ。そうだ、もうすぐイベントの搬入準備とかあるんだろ？　よかったら車出すよ」

「ありがとう。すごく助かる……！」

「いいって。俺にはそれくらいしかできないからさ。未玖の新作、楽しみにしてる」

柔らかく目を細めて笑うお兄ちゃんの顔を盗み見て、また頬が熱くなってしまった。

——慧仁お兄ちゃんと私は、義理の兄妹だ。

私の母は看護師として勤めていた病院で、同じく医師として勤務し

ていた慧仁お兄ちゃんのお父さんと知り合い、恋に落ちた。

お互い早くに伴侶を亡くしたこともあり、意気投合したようだ。
そこまでは、ありふれた職場恋愛だった。

ただ、ひとつだけ『普通の家庭』と違っていたことがある。

慧仁お兄ちゃんのお父さんは、地域でも有数の大病院である、高遠^{たかとお}総合病院を経営する高遠家の跡取り息子だったのだ。

そして再婚を決めた頃に病院を継ぐことが正式に決まり、院長に就任することになった。

そのタイミングで母と入籍し、私と慧仁お兄ちゃんは家族になった。

母は女手ひとつで私を育ててくれた人だった。だから再婚して幸せになってくれたことは嬉しかった。

けれど『院長夫人』になってから、母は少しずつ変わっていった。

学校の成績や進路に厳しくなり、私が美術の道に進みたいと言っても、以前のように応援してくれなくなつた。

義父も、医療系か堅実な仕事に就いてほしいと考えていたらしい。美大を卒業してからも定職に就かず、アルバイトをしながら絵を描いている今の私を、両親が快く思っていないことは分かつていた。

（私は、悪いことをしているんだろうか）

『いつまで夢を追っているつもりなんだ』『いい加減現実を見なさい』『両親にそう言われるたびに、ずっしりと重い石が背中に乗っているようで苦しかった。』

両親の期待に応えられない私は、親不孝な子どもなのかもしれないと思うようになっていた。

けれど、慧仁お兄ちゃんだけは私を否定しなかった。

『お父さんとお母さんの言うことは気にしない方がいいよ。誰も未玖の人生に責任を取ってくれないんだから』

『後悔のないように、未玖はやりたいことをやればいい。俺が全力で応援する』

両親に厳しく叱責されて泣いていた私に、お兄ちゃんはそう言ってくれた。

そして、お兄ちゃんは私の創作活動にも力を貸してくれた。

公募展やアートイベントに出展するようになった私に、「俺に任せとけ」と車を出し、作品の搬入や設営まで手伝ってくれた。

さらに、油絵の具や画用液の匂いを気にして家では思うように制作できないとこぼした私に、郊外の小さな一軒家を借りてくれた。

「俺も息抜きに使わせてもらうから」

そう言って、そこを私のアトリエにしてくれたのだ。

お兄ちゃんだけは、どんな時でもずっと私の味方だった。

慧仁お兄ちゃんと初めて会った時、こんな綺麗な人が世の中にいるのかと衝撃を受けた。

淡いミルクティーのような、美しい色の髪。

切れ長でぱつちりとした瞳の色も、透き通るようなライトブラウンで。

綺麗な輪郭を描く卵形の小さな顔に、完璧なカーブを描く鼻梁、薄い唇。

更に日本人離れした、すらりと長い手足。

亡くなったお母さんの親族に北欧系の血を引く人がいたらしく、その隔世遺伝かもねと笑っていた。

思い描いていた『王子様』が本の中から抜け出てきたようでした。しばらくぼーっと見とれてしまったほどだ。

けれどお兄ちゃんが完璧なのは容姿だけではなかった。

勉強も運動も優秀。それでいて気さくで面倒見がよく、怒ったところを見たことがない。

卒業後、義父の病院で研修医として働き始めてからも、患者さんやスタッフから慕われているらしい。

そんなお兄ちゃんに、私は何度も助けられてきた。

憧れの念が恋心へと変わるのに、そう時間はかからなかった。

いつしか私は、慧仁お兄ちゃんを「兄」ではなく、一人の男性として見るようになっていた。

けれど、この気持ちを伝えることはできない。

今の関係を壊すくらいなら、一生胸に秘めておこう。

そう思っていたのに……

くすぶる想いを抑えきれず、私はお兄ちゃんに愛される妄想をしながら、一人えつちをするようになってしまったのだ。

（まさかお兄ちゃんのこと考えて毎日オナニーしてるなんて、とても言えないよ……）

甘く耳元でいやらしい言葉を囁かれて、薄い唇で口づけられて。

あの長く綺麗な指先で乳房を揉みしだかれて、ショーツの中に手を入れられておまんこを触られている妄想をしながら自分の股間を弄っているなんて知ったら、きつと軽蔑されてしまうだろうから。

「あ……そうだ。今度家に、晴美^{はるみ}叔母さんが来るらしいぞ。昨日、俺

の携帯に電話があつた」

「え……？　いつ？」

「今週の土曜だつて。お前に話があるつて言つてた」

「……わ、私に……何だろう……？」

「さあ……とにかく当日話すからの一点張りだつた。親父もおふくろもないけどいいのかつて聞いたたら、もう了承済みだから問題ないつて」

お兄ちゃんも困惑したように首をかしげている。

（いやだな……晴美叔母さん、苦手なんだよね……）

晴美叔母さんは、義父の妹にあたる人だ。世話好きでいい人だと思ふけれど、なんだかずかずかこちらに踏み込んでくる感じがして……あまり会いたくない相手だ。

そんな私の心の内を察したのか、お兄ちゃんが明るく言った。

「俺も同席するから大丈夫。ちょうど夜勤明けだし、朝には家に戻ってるだろうから」

「そんな、悪いよ。お兄ちゃんだって疲れてるのに……」

「大丈夫。叔母さんくるの昼過ぎからみたいだし、それまでゆつくり寝られるからさ」

ぽんぽん、とお兄ちゃんが私の頭を優しく叩く。

なんだか涙が出そうになっちゃった。

（仕事で忙しいのに……お兄ちゃん、優しすぎるよ）

この家に来てから、お兄ちゃんが疲れた顔をしているのを見たことがない。

いつも笑顔で、『大丈夫だよ』と頭を撫でてくれる。

そんなお兄ちゃんのことを大好きだけど……時々心配になる。

お兄ちゃんは、辛い時や苦しい時、どうしているんだろうって。

ちゃんと吐き出せているんだろうか？

その相手に……私がなれたらいいのに。

(……なんて、叶わぬ願いだけど)

いつか、お兄ちゃんにもそういう人ができるのだろうか。

私に向けないような表情を見せたり、頼ったり、甘えたりするのだろうか？

そんなことを考えると、胸が苦しくなる。

きょうだい
義兄妹にならなければ、きつと出会わなかった人だった。

でも——もし、私とお兄ちゃんが他人だったら……なんて夢見てしまふ。

「……どうした？ 未玖。やつぱりどこか具合が悪いんじゃない？……」
うつむいて涙をこらえている私の顔を、お兄ちゃんがのぞき込もうとする。

「な、なんでもないよ……！ わ、私、顔洗ってくるから」

お兄ちゃんから顔を隠すようにそっぽを向き、そそくさと洗面所へ向かった。

——そして、土曜日になった。

「こんにちは。未玖ちゃん、慧仁くん、久しぶりねえ」

お昼どきを少し過ぎた頃、晴美叔母さんがうちへやってきた。

茶色に染めた髪の毛をくるくるに巻いて、紺色のさらりとした素材のワンピースを身に着けている。首元にはシンプルだけど高級感のあ

るネックレス。

肌のお手入れも完璧で、シミひとつない。

四十代には見えない若々しき溢れるところが、また苦手だったりする。

「こんにちは、晴美叔母さん。相変わらずお元気そうだなによりです」

「慧仁くん、あなたさつきまで寝てたでしょ？　ねぐせ、ついてるわよ」

「アハハ、バレましたか。実は夜勤明けです」

お兄ちゃんは照れくさそうな笑みを作って、頭を掻いてみせた。

「未玖ちゃんは相変わらず子どもっぽい服着てるのねえ。ダメよ、そんなフリフリの安っぽい服。もういい年なんだから、もっと素材の良

い上質な服を着るようになさい」

「は……はい……すみません……」

叔母さんに鼻で笑われ、引きつった笑みを浮かべて答える。

（この服……お気に入りになんだけどな……）

そんな様子を察した慧仁お兄ちゃんが、私を庇うように一歩前へ出た。

「まあまあ、この年頃の子はフリルがたくさんついた可愛い服が好きなんですよ。うちのスタッフの子たちだって、私服は似たようなものですから」

「ふうん……若い子の服装はよくわかんないわねえ。まあいいわ、さつさと本題に入りましょ」

叔母さんは勝手知ったる自分の家とばかりに、さつさとダイニング

テーブルの椅子へと腰掛ける。

そしてバッグから白い封筒を取り出し、私へ差し出した。

「つり……がき……？ 叔母さん、これって……？」

「あなたのお見合い相手の自己紹介書よ。まあ……今風に言うところプロフィールカードってところかしら？」

「お、お見合い……？ 私が……ですか？」

状況が呑み込めず、戸惑いがちに晴美叔母さんを上目遣いで見る。

叔母さんはわざとらしいくらいにニツコリ微笑み、真っ赤に塗られた唇を開いた。

「えーえ、そうよ？ 未玖ちゃんにぴったりのお相手がいらつしやると、知り合いの奥さんからご紹介いただいたの」

「ちよつと待ってください。未玖はまだ大学を出たばかりですよ？」

結婚なんて早すぎる」

慧仁お兄ちゃんが、わずかに声を荒らげる。叔母さんはじろりとお兄ちゃんをねめ付けた。

「どうせ就職する気もないんだから、若いうちにさつきといい人に貰われた方がいいに決まってるでしょ。兄さんとお義姉^{ねえ}さんもそう言うってたわ」

「……！」

叔母さんの言葉で全てを察してしまった。

このお見合いは、両親から叔母へ頼んだものなのだと。

叔母さんは、更に追い打ちをかけるようににぺらぺらとまくしたてる。「お絵かきなんていつだってできるじゃない。結婚すれば旦那さんに養ってもらいながら趣味で好きなだけ絵が描けるのよ？ そっちの方

が未玖ちゃんにとつてもいいんじゃない？」

「そ……それは……」

うつむいて、ぎゅつと膝に置いた手を握りしめる。

反論ができない。傍から見たら、私がただ遊んでるように見えるのは分かつているから。

「叔母さん、未玖なりにこの先絵で食べていけるよう、色々考えてるんです。公募展やアートイベントに出展して、少しずつだけ結果を出せている。もつと長い目で見てもらえませんか？」

お兄ちゃんが椅子から立ち上がり、テーブルへ手をついて叔母さんへ向かつて身を乗り出す。

叔母さんは唇を歪め、皮肉めいた笑みを浮かべた。

「あらそう。ところで……慧仁くん。あなたはどうかの？」

「どう……って、何がですか？」

「兄さんはあなたのことも心配してたわよ。お見合いの話を全部断っているそうじゃない」

「俺はまだ、研修医ですし……しばらくは仕事に専念したいので、結婚は考えられないと父にも話しました」

「どうかしらねえ？ あなた、未玖ちゃんにべったりだそうね？ まるで保護者みたいに。結婚に踏み切れないのは、未玖ちゃんから妹離れできないせいなんじゃないの？」

「そ、それは……兄として、妹の面倒を見るのは当然だと……」

「子どもじゃないんだから、自立させないとダメよ。あなたは次期院長なんだから、早く身を固めて兄さんたちを安心させてあげなさい。もう二十六歳なんだから、そろそろ結婚を真面目に考えてもいいはず

よ」

叔母さんが、私をキツと見据える。

「未玖ちゃんも、慧仁くんの足をいつまでも引つ張つてないでちゃんと先のこと考えなさい？　あなたのせいで慧仁くんが結婚できないのよ？」

「……………！」

頭の中が真っ白になった。

（全部……私のせい……なの？）

そういえばお兄ちゃんは何度か恋人が出来ていたけれど、気がついたら別れていた。

『俺は、未玖が一番大事だから』

なんて言われて嬉しかったけど。

（もしかして私がフラフラしてるから、お兄ちゃんは私を置いて出て行けなかったのかも……）

私がお兄ちゃんをずっと、縛り付けていたんだ。

何も知らずお兄ちゃんの優しさに甘えて、頼り切って……なんて私は浅はかだったんだろう。

叔母さんが何か熱心にお兄ちゃんと言いつけているけれど、言葉が頭の中を滑るばかりで、何も耳に入ってこない。

——その後のことは覚えていない。

気がついたら叔母さんはいなくなっていて、お兄ちゃんが私の目の前に座っていた。

「……未玖。叔母さん、帰ったよ」

「……」

うなだれたままの私のつむじに、お兄ちゃんの優しい声が降り注ぐ。
「叔母さんの言うことは気にするなよ。ああいう人だって未玖も知ってるだろ？」

「……でも……全部本当のことだから……」

頭の中で、叔母さんの言葉がグルグル回っている。

全部私のせいだ。私のせいで、お兄ちゃんは自分の人生を棒に振ろうとしている。

私がお兄ちゃんに、いつまでも甘えていたから……

（……このままじゃ、ダメなんだ）

ずっとお兄ちゃんと一緒にいたい。

でも私といたら、お兄ちゃんは『跡継ぎ』としての役目を果たせず、
こうやって周りからずつと責められ続ける。そんなの耐えられない。

(……自立、しなきゃ)

お兄ちゃんはきつと、私を見捨てることなんてできない。

だったら……私から離れないといけないんだ。

ぐつ、と唇を噛みしめて顔を上げる。

「……お兄ちゃん、私……お見合い、受けようと思う」

「……え……？」

お兄ちゃんの顔から、一瞬だけ笑顔が消えた。

「あつ、あのね！ 叔母さんに言われて目が覚めたの。私もそろそろ
先のこと、ちゃんと考えた方がいいなと思って……」

詰まりそうな喉から強引に言葉を押しだす。

明るく話そうとするけれど、声が上ずってうまく喋れない。

お兄ちゃんにもそれが伝わっているのか、氣遣わしげにこちらを見ている。

「未玖。無理しなくてもいいんだぞ？ さつき叔母さんにも言っただ、結婚なんてまだ早すぎるくらいなんだから」

「いつ……いいの！ 今のままじゃ、いつまでたっても自立なんて出来そうにないし……それに、叔母さんの紹介してくれた人なら、安心……だろうから……」

お兄ちゃんの視線が突き刺さる。

引きつれた喉が痛い。もしかして全部、見抜かれているのだろうか？

重たい沈黙が、私たちの間に流れる。

お兄ちゃんはしばらく唇を引き結んで何か考えていたようだけれど、やがて小さくため息をついて、いつものように穏やかに微笑んだ。

「……そっか。未玖が決めたことなら何も言わないよ。いなくなるのは、寂しいけどな」

「……もし結婚しても、家にはちよくちよく帰ると思うから」

「うん。そうしてくれると嬉しい。もし嫁ぎ先で何かいやなことをされたらすぐ俺に言うんだぞ？ 飛んで行くから」

「……うん。ありがとう」

ぼん、と大きくて温かな手が私の頭に載せられる。

途端に喉から涙の塊がせり上がってきて、慌ててぐつと飲み込んだ。

——夜。

なんだか眠れそうにないから、いつもより多めにサプリを飲んでベツドへ入った。

私は、大学に入学した頃からこのサプリを飲んでいる。

両親の反対を押し切り美大に進んだものの、思うように課題の制作がうまく行かず不眠に陥った時期があったのだ。

その時、お兄ちゃんがこのサプリを勧めてくれた。

「睡眠薬と違って依存性や副作用もないから安心だよ」と。

それ以来、お兄ちゃんから勧められたサプリを、寝る前に飲むのが習慣になった。

(……これで、いいんだよね)

本当はお見合いなんてしたくない。ずっとお兄ちゃんのそばにいた

い。

でも……一生お兄ちゃんを束縛するわけにはいかない。

私がいなくなれば、お兄ちゃんもいい人を見つけて幸せになれる。お互いに支え合って、一緒に人生を歩んでいける素敵な人が――

「……っ……」

ぼろつと涙がひとつぶ零れる。

どうしてそれが、私じゃないんだろう。

どうして、私だけがお兄ちゃんの隣にすることを許されないんだろう。

本当は止めてほしかった。

『俺のそばから離れるな』って、抱きしめてほしかった。

そんなこと……ありえないのに。

（ああ……早く眠くならないかな。もう何も考えたくないよ）

涙で濡れた目もとを手の甲で拭い、枕を抱きしめて布団の中でうずくまる。

ずっと眠っていたい。いつそのまま目が覚めなければいいのに。

——なんて考えていたら、ようやく待ちわびていた眠気が訪れる。

ゆつくりと水の底へ沈むように、意識がぼやけて——深い眠りに落ちていった。

ちゅぷ……ちゅぷ……

耳元で、何か水つぽい音が聞こえる。

「……………未玖……………いやだ……………く、ない……………」

苦しげな息づかいと共に、誰かが囁く声が聞こえてくる。

(誰……?)

頭がぼーっとして、うまく働かない。

もしかしてこれは、夢の中なんだろうか？

ぴちゃ……ぴちゃっ……

「……っ……っ……♡」

胸のあたりに、何かがぺったり♡と張りつく感じがする。

温かくて……しっとりしてて……

夢にしてはやけに感触がリアルだ。

(何……これ……?)

うつすらと目を開けると、そこには――

「……っ！」

うつとりとした顔で私の乳房を舐めている、お兄ちゃんの姿があった。

「……おにい、ちゃん……?」

ぼうつとしたまま呟くと、お兄ちゃんはハッとして私を見た。

「未……玖……」

お兄ちゃんが顔をこわばらせて、私の乳房から唇を離す。

わずかに頭を持ち上げて、おそろおそろ自分の胸元に視線を向ける。乳首がお兄ちゃんの唾液でぬらぬらと濡れていて、これが現実だということを見せつけているかのようだ。

「何……してたの……？」

「何って……見れば分かるだろ。未玖に……いやらしいこと……してたんだよ」

「どうして……？」

「だって……お見合い、するんだろ？」

お兄ちゃんが吐き捨てるように言い、冷ややかな眼差しを私へ向ける。

いつもの優しいお兄ちゃんとはまるで別人のような表情に、ゾクッ

と背筋が寒くなる。

「それと、何が関係あるの……？」

「……そっか、未玖は分かってなかったのか……」

くしゃ、とお兄ちゃんが自分の髪をかき回し、薄く笑う。

「まあ、そうだよな。普通は義理の妹を女として見てるなんて……思わないもんな」

「……え？」

お兄ちゃんがぐつと私に顔を寄せて、かすれた声で言った。

「俺は……未玖のことをずっと——好き、なんだ。妹としてじゃなくて、一人の女性として」

「……っ！」

「おかしいだろ？ お前が他の男に取られるかもしれないと思うと頭

がどうにかなりそうなんだよ。だからずっと、他の男が近付かないように見張ってたっていうのに……まさかこんなことになるなんてな」

——信じられない。

お兄ちゃんが私を好き？　まだ私は夢を見てるんじゃないだろうか？

こんな、切ない瞳で私に訴えかけてくれるなんて。

こんな、すがりつくように私を求めてくれるなんて。

「でも……目が覚めてくれて良かったかもな。じゃなかったら俺、ずっとお前の寝込みを襲うの、やめられなかったかもしれないから」

「ずっと……もしかしてお兄ちゃん、これが初めてじゃないの……？」

一瞬、今朝感じた違和感が脳裏に蘇る。

このところずっと、目覚めると下着がありえないくらい湿っていた。

あれは、もしかして――

お兄ちゃんが唇を歪めて、自嘲気味に笑う。

「そうだよ。未玖に渡してたサプリ。あれ、海外から個人輸入したものでさ。実際は睡眠薬と変わらない成分が含まれてるんだ。サプリにしては眠れすぎると思わなかったか？」

「ううん……お兄ちゃんがくれたものだから、安心だっと思ってた……」

そう答えると、お兄ちゃんは「あーあ」と呟いて額に手を当て、うつむいた。

「未玖は俺のこと、信じすぎなんだよ。そんなだから俺……心配で離れられなかったのに」

頭の中がぐちゃぐちゃでうまく考えがまとまらない。

本当なら、怒るべきなのかもしれない。

泣きわめいて、こんなの最低だってお兄ちゃんを罵るべきなのかもしれない。

——でも、出来なかった。

だってそれは私も、心の奥で望んでいたことだから。

「……ごめん。俺、何やってんだろな。最低だ」

お兄ちゃんは手のひらで顔を覆ったまま、低く呻いた。

「俺は……未玖を裏切った……未玖は俺を、信じてくれていたのに……」

私は何も言えなかった。

どうしていいのか分からなくて、言葉が出てこない。

「……もう、こんなことしないから。サプリも、残ってる分は捨ててくれ」

お兄ちゃんがのろのろと身を起こし、ベッドから降りようとする。その背中を見た瞬間、ずきりと胸の奥が痛む。

お兄ちゃんのしたことを許せるのかどうか分からない。でも——
このままお兄ちゃんを行かせてしまったら、二度と触れてもらえない。
い。

（そんなの……いやだ）

気づけば私は、お兄ちゃんのシャツの袖を引っ張っていた。

「……未玖……？」

「……行かないで……お兄ちゃん、ここにいて……」

ぎゅう、と力一杯腕にしがみつく。今この瞬間を逃したら、二度と言えない気がして。

「あのね……わっ……私もずっと……お兄ちゃんが好き……だったの……」

「……………」

お兄ちゃんが動きを止め、ゆつくりと振り返って私を見た。

「……嘘、だろ……?」

「嘘じゃないよ……! お兄ちゃんはずっと私に寄り添ってくれた……」

……だから……私はこれから、お兄ちゃんのそばにいたい……!」

お兄ちゃんの顔に、戸惑いと困惑が浮かぶ。

「未玖……そんな風に思ってたのか」

「うん……でも、私のせいでお兄ちゃんを縛っちゃうのはいやだから

……結婚して家を出れば、お兄ちゃんは自由になれるって思ったの。

だから……っ」

お兄ちゃんは目をみはったまま動かない。いや、動けないように見えた。

そしてぎこちなく手を伸ばし――

ふわり、と私の身体をお兄ちゃんが包み込んだ。

「嬉しい……ありがとう、未玖」

大きな手のひらが、私の頬を覆う。

綺麗な顔が近付いてきて――唇が、そつと重ねられる。

「ふぁ……♡」

ちゅ……♡ちゅぷ……ちゅ……ちゅむっ……♡

唇にちゅっ、ちゅっ、とスタンプを押すように口づけられる。

「ん……は……っ……♡未玖の唇……甘くて、美味しい……♡」

ちゅ……ちゅぷ……ちゅむ……っ……♡

唇を優しく食まれて軽く吸われる。

柔らかくてしつとりしてて……思い描いていたお兄ちゃんとのキス

よりも、熱がこもっていて。

ぼうつと頭の裏が痺れてくる。

唇の裏のぬるぬる♡したところに触れると、なんだかすごくえつちなことをしているような気持ちになって……頬がどんどん熱くなっていく。

「ん……ふ……う……ん……♡」

されるがままに顎を上げて、唇を半開きにする。

すると、れろり……♡と歯の間を割って、厚く長い舌が差しこまれた。

「ふあ……？ は……ふ……う……んう……っ……♡」

ちゅ……♡れろれろ……♡くちゅくちゅ……♡♡

（口の中っ♡舌でぐちゅぐちゅかき回されてる……♡何これえ……♡♡

すごくえつちな音、してっ……♡ただキスしてるだけなのにつ……

♡)

喉の近くを舌で突かれると、じわあ……♡と甘痒い感覚が粘膜に広がってゆく。

まるで口の中をとろとろに蕩かされているみたい。

キスでこんないやらしい気持ちになるなんて。

私……自分が思っているよりえつちな子だったのかも。

「っ……は……っ……♡」

長い口づけのあと、ようやくお兄ちゃんが唇を離す。

まだ夢の中にいるみたいでぼうっとして……お兄ちゃんを見上げたまま動けない。

「ふふ……キスがそんなに気持ち良かった？　可愛いな……♡」

ぎゅつと抱きしめられ、頭を優しく撫でられる。

「なあ……未玖……俺、もう止まらないよ……。ずつと我慢してたのに……まさか、お前が俺のことを……夢みたいだ」

「私も……だよ……」

「未玖の身体……全部、見たい……。服、脱がしてもいい？」

耳元で囁かれ、魅入られたようにこっくりと頷く。

お兄ちゃんがパジャマのボタンに手をかけ、ひとつずつゆっくりと外していく。

「……っ……♡すごく……綺麗だ……」

露わになった胸元を、お兄ちゃんが恍惚とした表情で見つめている。じつとおっぱいを見られているのが恥ずかしくて、反射的に手で覆ってしまった。

「あ……あんまり見ないで……」

「ああ……ごめんね。あまりにもすべすべで、柔らかそうで……可愛
いおっぱいだから……」

「でも……私、そんなに胸は大きくない、し……」

「大ききなんて関係ないよ……俺は未玖の全てが愛しいんだから……
ねえ、隠さないで？　ちゃんと……俺に見せて……」

「あっ……♡」

手首を柔らかく掴まれ、胸から引き剥がされる。

お兄ちゃんが胸元に顔を寄せると、熱い吐息が乳房にかかって、そ
れだけで胸がざわついてしまう。

「乳首も綺麗なピンク色だな……♡小さくて、ぷっくりしてて……あ
あ、寝てる時もこっそり見てたはずなのに……恥ずかしがってる未玖

のおっぱいだと思うと……たまらなく可愛くて……いやらしい……」

舌先がつん、と乳輪に触れる。

ちろちろ……♡と円を描くように乳首の根元を舐め回されて、つんと甘痒い刺激が胸の内側へこみ上げてくる。

「や……あ……つ……は……う……♡おに……いちや……♡」

気がつけば私は、お兄ちゃんの頭を両手で抱え、自分から引き寄せていた。

ちろ……れろれろ……♡ちゅばちゅば……♡

お兄ちゃんの唇がちゅっ♡と乳首の先っぽに吸いついて、舌がれろれろ♡と硬く膨らんだ乳頭を舐め転がす。

空いた片手で乳首を摘まんでくりゅ♡くりゅ♡と押し潰されると、甘い痛みが乳首からつんと滲み出て、胸の中で異なる感覚が混ざり合

って溶けてゆく。

オナニーしているとき、自分でおっぱいを弄りながらイクことはあったけれど。

自分で触るのは全然違う。

熱くぬらついた舌は、今まで得たことのない快感を、胸の奥から引っ張り出して。

今まで出したことがないような、鼻に抜けるような媚びた喘ぎ声が出してしまう。

「ふ……あ……っ♡あっ♡や……っ♡ちくび……っ♡だめえ……♡」

これは私が出した声なんだろうか？

今お兄ちゃんを抱き寄せて、自分から胸を吸わせているのは本当に私なのだろうか？

まるで自分が自分じゃないみたい。

快感が内側から私の理性をどろどろに蕩かせて、心の奥深くに押し込めていた欲望が剥き出しになったようだ。

「は……っ♡未玖の感じてる声……可愛いな……♡もつと聞かせて……♡」

かりっ♡こりこり……♡くにゅっ♡くにゅっ♡

歯を立てて軽く乳首を擦られ、指先でもう片方の乳頭を押し込んでぐりぐりとこね回される。

「……♡……♡……♡——っ♡あっ♡ひんっ♡だめっ♡だめだめだめっ♡♡♡——っ♡♡♡♡」

びくっ♡と腰が大きく跳ね上がり、ぎゅう……とお兄ちゃんの首にしがみつく。

おまんこが熱く潤んで、とろ……っ♡と中から蜜が溢れて下着を濡らす。

「……未玖、おっぱいだけでイッちゃったんだ。やらしいな……♡」
「わ……たし……今……イッ……てたの……？」

「うん。すっごいびくびくして、可愛かった。……もしかしてもう、おまんこも濡れてたりする……？」

「え……あ……わ、わかんない……」

咄嗟に、ふるふると首を横に振る。

本当は、ショーツがぐっしより濡れていたのは知っていたけれど。
なんとなく、お兄ちゃんに言うのは恥ずかしかったから。

「……じゃあ、俺に確かめさせて？」

「ふあ……っ……♡」

膝立ちになっている私をベッドに座らせ、腰に手を掛けてパジャマのズボンをそろそろと脱がす。

恥ずかしくて太ももをぎゅつと擦り合わせていると「ほーら、足開いて」と強引にばかあ……♡と両足を掴まれ割り開かれてしまった。

お兄ちゃん私の横に座り、背中を丸めて股間をのぞき込む。

「うわ……お漏らししたみたいにぐっしよりだな。クリまで透けて見えて……やらしい……♡」

「やあ……っ♡み、見ないで……っ♡」

「未玖、濡れやすいもんな。なあ、クリ……前より大きくなったと思わないか？」

「え……？　そ、そう……かも……？　よく……分らないけど……」

「

「……寝てる間に、ココ……こうやって何度も触ったから」

とん……♡とん……♡

下着越しに、ぽっちりと膨らんだ肉芽を指で優しく叩かれる。

たったそれだけなのに、じんっ♡じんっ♡と先っぽが痺れて熱を帯びてゆく。

「ふ……ああ♡やつ、やああ……♡なに、これえ……♡」

「気持ちいいだろ？ クリがどんどん膨らんでる。未玖、寝てるのに腰ビクいっぱいして……可愛かったなあ……」

とん……♡とんとん……♡とん……♡

お兄ちゃんが陶然とした表情を浮かべて、さっきより強めにタップする。

そのリズムに合わせるかのように、勝手に腰が浮き上がって、自分

から指先にクリを押しつけてしまう。

（やだっ♡こんなっ♡はしたないっ♡私っ、何やってるのっ……♡）
ただ軽く触れられているだけなのに、じんわりとクリの中心に血が
集まってきて感覚が鋭敏になっていく。

オナニーでこんな風になったことなんて、ないのに。

私の身体……どうしちゃったんだろう？

「自分からクリ押しつけて腰くねくね♡させて……可愛いな……♡そ
んなにクリ、触ってほしかったのか？」

「ちが……違うう……♡だつてっ、ここっ、むずむずする。からあ……
♡」

「とんとん♡だけじゃ物足りないんだろ？ もっと気持ち良くしてや
るから……♡」

かりっ……♡

「……あ……っ……ッ♡」

軽く曲げられた指先が、屹立した陰核を淡く引っ搔いた。

「い……やああああ……♡やだ♡これだめっ♡だめなのぉ……っ♡」

「ハハ、未玖はカリカリも大好きだもんなあ。俺……未玖の感じるとこ全部知ってるんだぞ？ ほら、こうやって強めに引っ搔くと——」
かりかりかりかりっ♡

「……っひ……♡」

きゅううううっ♡と肉芽の中心から快感の芯を引っ張り出されて、びくう♡と大きく腰が跳ねる。

どくっ♡どくっ♡とクリが脈打っていて、根元から痛いくらいにび

ーんと勃起あがっているのが分かる。

「ほら、さつきより気持ちいいだろ？」

「ふ……あああ……♡はあ……つあ……♡おにい……ちや……♡もお
クリ、いじめないでえ……♡私……どんだんえつちに、なつちやう……
♡」

「えっちな未玖がもつと見たい。なあ……いつもどんなオナニーして
るのか、俺に教えて？」

耳元で囁かれ、ぞくん……♡とうなじが震える。

「や……だ……っ……♡恥ずかしい……からあ……♡」

身をよじって逃れようとする、更にお兄ちゃんの唇が追いかけて
きて、耳を甘く食む。

「な……俺だけに……教えてくれよ……♡」

「ひゃああ……♡」

ぞわぞわ♡がうなじから後頭部まで這い上がってきて、頭の中まで染みこんでくる。

恥ずかしいって感情すらも、こみあげる情欲を煽る要素でしかなくなっていく。

もつとお兄ちゃんにいやらしいことされたいって欲望で、満たされてしまう。

「……ほら、早く……。教えて、くれないの？」

つう……と唇が耳の後ろを這う。耐えられなくなつて、絞り出すような声で告白する。

「下着の上……から……軽くなぞって……中に手を入れて……クリとか……お、おまんこを……擦ったり……して……る……」

「……それだけ？」

「それだけ……だよ……っ」

「じゃあ……クリでイッたことは、ない？」

「わ……わかんない、けど……っ♡こんな風に、変になったりは……しない……」

「ん……赤ちゃんみたいなオナニーしてるんだな……可愛い……♡」
するりとショーツを脱がされ、露わになった下腹部へお兄ちゃんの指が伸びた。

「ふ……え……っ!？」

「未玖がクリイキできるよう、しっかり触り方教えてやるよ。次から……俺を思い出しながらやってみて」

淫裂に長くすらりとした指が伸び、ぬるう……♡と指に蜜を纏わせ

る。

ぬらぬらと淫らに光る指先が、真っ赤に腫れたクリの中心をきゅっ♡と押し込んだ。

「ひゅん♡」

一瞬だけ、びりっ♡と電流を流されたみたいな刺激が肉芽の中に走る。

お兄ちゃんの指先は、ぺったりと平たく潰した淫芽をそのままくにくに♡とこね回し始めた。

「ひ……やああああっ♡やだ♡これやだっ♡クリっ♡ばかになっちゃうううっ♡」

「ほら、クリがズル剥けになってきた。ちんぽみたいにビンビンになつてすごくえっちだ。未玖もこれで、赤ちゃんクリ卒業だな……♡」

剥き出しになった神経を暴力的な快感で嬲られて、何度ものけぞり腰を大きく突き出してしまふ。

(知らないっ♡こんなの知らないっ♡)

まるで私が私じゃないみたい。こんな恥ずかしい格好、お兄ちゃんの前でしたくないのに……っ♡

お兄ちゃんの腕に背中を押しつつけて、まるでおまんこを差し出すように大きく足を突っ張って、天井へ向けてお尻をへこへこ♡と振っている。

「うわ……未玖、やらしい……♡こんな下品な格好して腰へこするなんて、思わなかったな」

「ごめんなさいっ、ごめんなさい……♡私のことっ、嫌いにしないでっ……♡」

「ならないよ。だって俺の指でこんなに乱れてくれているんだろ？

むしろ……愛しくてたまらない。なあ……もつと未玖のえつちなところ、俺に見せて……♡」

すりっ♡すりっ♡

片手が乳房をまるく撫で、乳首を指で挟んでぴんっ♡ぴんっ♡と弾く。

収まりかけていた上半身が再び熱を帯び、お腹の中で一本の線となつて下腹部と繋がってゆく。

「~~~~~……ッ♡やあああっ♡おっぱいとっ♡クリっ♡一緒にいじめるのっ♡だめえええ♡」

びくん♡びくんっ♡と絶え間なく跳ねる身体を、お兄ちゃんの腕が力強くホールドする。

自由に動けないようお兄ちゃんに身体を拘束されているという事実が、媚薬みたいに身体の芯に染みこんで、蕩かせてゆく。

「おに……いちゃ……♡ほんとにつ♡もお♡ゆるし……てっ♡わらひもおっ♡ばかに……なっひやうう♡」

「♡あ♡♡とろつとろの顔、かわい……♡ばかになっちやえよ、未玖っ♡」

お兄ちゃんの指腹が裏筋を捉え、ぷちっ♡と押し潰しながらちこちこちこち♡と円を描くようにこね回す。

お腹の底から断続的に這い上る快感が、大きなうねりとなって全身を駆け巡る。

「とけ……りゅっ♡からだときりゅっ♡だめっ♡だめだめだめええええ♡」

「だめじゃないよ、『イク』だよ♡ほらいけっ♡イケイケイケっ……♡俺の指でやらしくアクメしろ……っ♡」

きゅううううう♡くりくりくりくり♡

ちこち♡ちゅこちゅこちゅ♡むにい♡ぎゅむっ♡ぎゅむっ♡乳首とクリをほぼ同時に、強く引っ張って扱かれる。

ぶわっ、と鳥肌が立つような悪寒に似た感覚が、身体を中心に突き抜ける。

下腹部をびくびくううう♡と引きつらせ、私は喉を反らせて悲鳴じみた声をあげた。

「くく………ッ♡あ……っ♡っ……やあ………ッ♡」

とろっ……♡とおまんこからねっとりした蜜が溢れ、ぽたぽたとシツに垂れ落ちた。

「は……っ♡はあ……♡はあ……♡はあ……♡」

「上手にイケたな、未玖……♡」

くったりと身体を預けると、お兄ちゃんがよしよしと頭を撫でてくれる。

（私……お兄ちゃんといつちなこと……しちやつた……っ……♡）
ずっと叶えられないと思っていた願いが、叶ってしまった。

ああ、でも――

（これで……『兄妹』にはもう、戻れない……）

その事実が、遅れて胸の奥に落ちてきた。

今まで必死に保とうとしてきた、『甘えん坊の妹』という仮面が外

れてしまった。

お兄ちゃんを、自分の性欲で穢してしまった。

お兄ちゃんは正しく『兄』であらうとしてくれていた。

私を守ろうとして、必死に理性で欲望を押しとどめようとしてくれていたのに。

お兄ちゃんに甘えて、守ってもらって、何も知らない妹の顔をしていれば、ずっと『仲の良い兄妹』でいられたのに。

「……ごめんね。お兄ちゃん……」

「どうして、未玖が謝るんだ？」

「……兄妹なのに……こんなこと、しちやつて……」

お兄ちゃんが私の頬を両手で包み込んで、優しく語りかける。

「未玖の身体を弄んだのは俺だ。未玖はただ……俺に迫られて強引に気持ち良くさせられただけ……だから……そんなに悲しい顔をしないで」

透き通るような琥珀色の瞳に見つめられて、涙がじわつと滲んでくる。

——本当は、これで終わりだななんていやだ。

もつとお兄ちゃんと触れ合いたい。お兄ちゃんの全てを、身体で受け入れて……ひとつになりたい。

でも、これ以上お兄ちゃんを傷つけたくない。

きつと求めれば、お兄ちゃんはまた応じてくれるのだろう。
けれど、身体を重ねれば重ねるほど、お兄ちゃんに重いくびきを負
わせてしまう。

——だから。

（もう……やめよう）

一度だけの過ちならば、きつと忘れられる。
気の迷いだったと言いきかせられる。

この想いは心の奥底に沈めて、『甘えん坊の妹』へ戻ろう。
それが今の私にできる、たったひとつのことだから。